

鶴岡の農林水産業



実りの秋を迎えた稲穂



きゅうりの大規模園芸施設団地



「J Tの森 鶴岡」森づくり活動



市内鼠ヶ関での底曳網漁

鶴岡市農林水産部 農 政 課
農山漁村振興課

〒997-8601 山形県鶴岡市馬場町9番25号

TEL 0235 (35) 1295

FAX 0235 (25) 8763

URL <https://www.city.tsuruoka.lg.jp>

E-mail nosei@city.tsuruoka.yamagata.jp

nousan@city.tsuruoka.yamagata.jp

令和6年4月発行

鶴岡市の概要

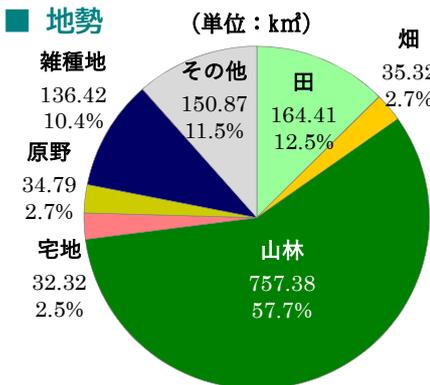
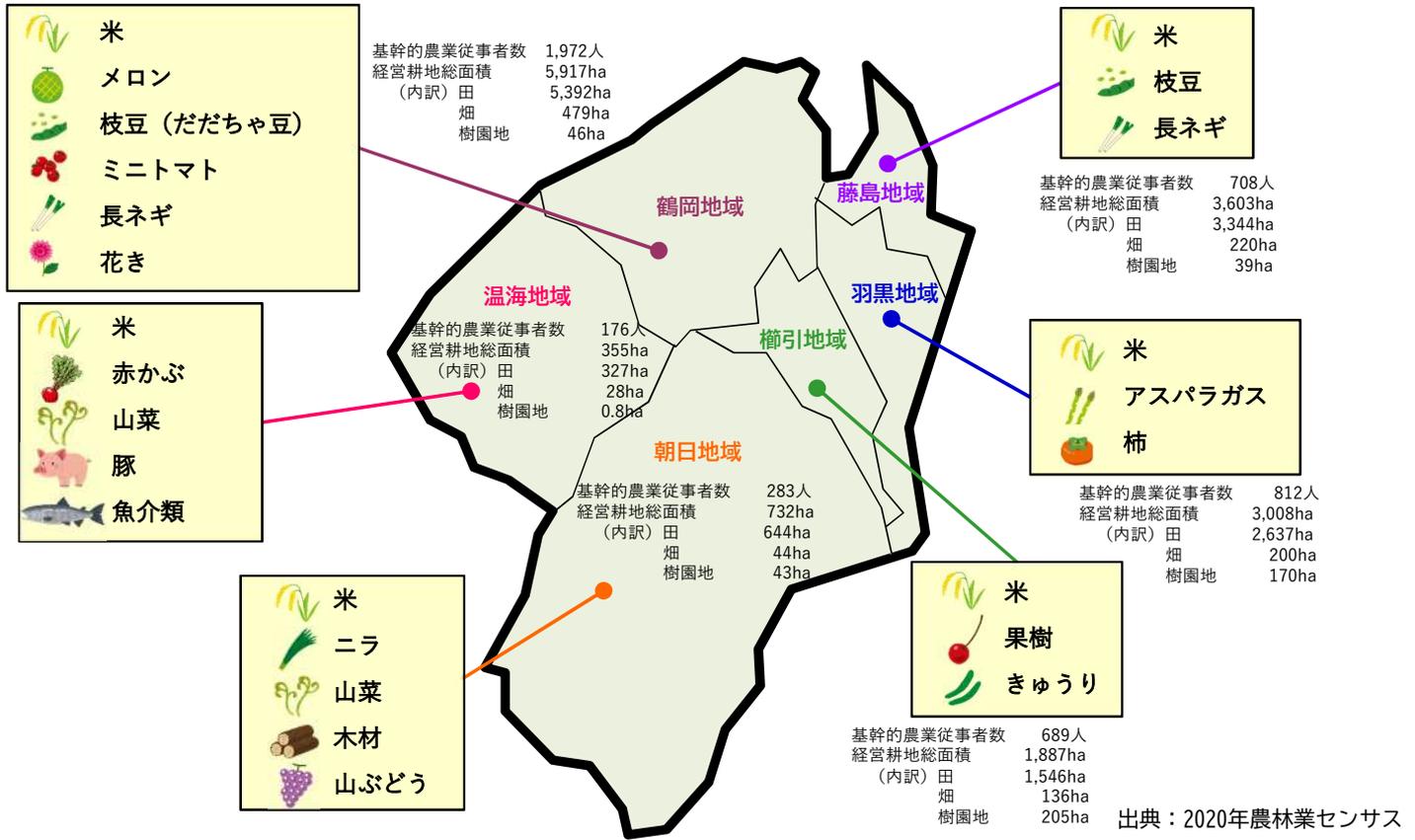
本市は山形県庄内地方の南部に位置し、新潟県に接しています。市内を赤川水系の赤川、大山川、最上川水系の京田川、藤島川などの河川が流れているほか、北部には庄内平野が広がり、東部から南部にかけては、出羽丘陵、朝日連峰、摩耶山などの山々が連なり、西部は日本海に面するなど、変化に富んだ地形を有しているのが特徴です。

平成17年10月1日には6市町村が広域合併し、東北一（全国第10位）の面積、県内第2位の人口を有する新「鶴岡市」が誕生しました。市域の約7割を占める広大な森林は、優れた木材を生産するだけでなく、貯蔵している豊富な水資源を安定的に供給する役割を担っており、農林水産物の生産や地域固有の食文化を育むなど、農林水産業を基幹産業とする本市を支えています。こうした豊富な資源を背景に、本市は平成26年に日本で初め

てのユネスコ食文化創造都市に認定され、平成27年に参加したミラノ国際博覧会では、鶴岡の食材や食文化が世界から大きな注目を浴びました。

また、平成28年には農林水産省が選定するSAVOR JAPAN（農泊 食文化海外発信地域、旧「食と農の景勝地」、令和4年度現在40地域）にも認定されており、鶴岡を訪れる訪日外国人観光客の増加に伴い、鶴岡産農林水産物の消費拡大が期待されています。

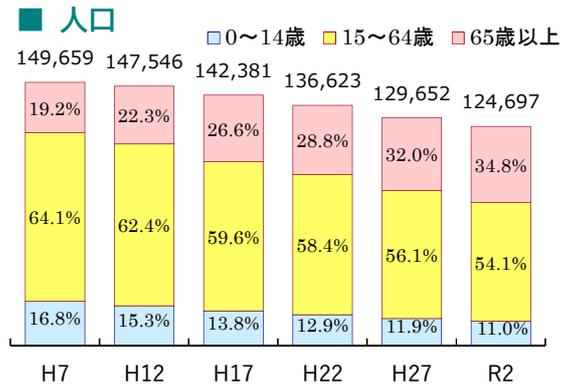
さらに、令和2年には内閣府において「SDGs未来都市」に選定され、森・食・農の文化と先端生命科学が共生する「いのち輝く、創造と伝統のまち鶴岡」の創出に向けて、様々な取り組みを推進しています。



気象 (R4)

| | 鶴岡市 | 東京 |
|------|-----------|-----------|
| 平均気温 | 13.3°C | 16.4°C |
| 最高気温 | 35.3°C | 37.0°C |
| 最低気温 | -6.6°C | -3.5°C |
| 降水量 | 2,396.0mm | 1,615.5mm |
| 日照時間 | 1,595.6時間 | 2,028.9時間 |

出典：気象庁 過去の気象データ



※ 本資料に掲載しているグラフは、特に注釈がない場合は、出典資料より鶴岡市のデータのみを抜粋したものです

目次

1 農業の動向

- P3 ○ 農業産出額
- P4 ○ 経営耕地面積 ○ 農地集積率 ○ 年齢別基幹的農業従事者数 ○ 新規就農者数
○ 認定農業者数 ○ 集落営農組織数
- P5 ○ 経営耕地面積規模別農家数、経営体数 ○ 主副業別農家数
○ 農産物販売金額規模別農家数、経営体数 ○ 6次産業化の取り組み動向
- P6 ○ 鶴岡「旬」カレンダー

2 水稻

- P7 ○ 水稻作付面積 ○ 水稻品種別の作付割合
- P8 ○ 水稻平均単収 ○ 一等米比率 ○ 共同乾燥調製施設 ○ 有機・特栽面積割合

3 主要園芸作物

- P9 ○ 主要園芸作物の作付面積、出荷量（枝豆、メロン）
- P10 ○ 主要園芸作物の作付面積、出荷量（庄内柿、ねぎ、かぶ、なす、きゅうり、トマト、花き、大豆）

4 畜産業

- P11 ○ 飼養戸数、頭羽数（乳用牛、肉用牛、豚、鶏）

5 林業

- P12 ○ 保有山林面積規模別経営体 ○ 保有山林別林野面積 ○ 民有造成林面積 ○ 林道の整備状況
- P13 ○ 民有林の面積・林齢・蓄積 ○ 保安林の指定状況 ○ 民有林の松くい虫による被害状況
○ 森林組合等 ○ 特用林産物

6 水産業

- P14 ○ 漁獲量の動向 ○ 漁獲額の動向 ○ 魚種別漁獲量・漁業種別漁獲量
- P15 ○ 栽培漁業 ○ 漁業後継者の育成・確保 ○ 地魚の評価向上と消費拡大

7 農林水産物・直売所マップ

- P16 ○ 農林水産物・直売所マップ

1 農業の動向

本市は、庄内平野の南部に位置し、作物の生育に適した気候と豊かな土壌に恵まれていることから、稲作を中心に農業が発展し、国内有数の米の産地となりました。また、各地域で異なる風土を生かし、在来作物などの特徴ある作物が育てられています。

本市の農業は、先人達のたゆまぬ努力と探求により、技術の進歩を重ねながら、近代的な高い生産技術が培われてきました。日本有数の穀倉地帯として、農業が他産業の発展も導きつつ、人々の暮らしを支えています。

また、生産者自身が加工、販売、観光農園などを手がける6次産業化や、食品加工業などの他業種と連携する農商工観連携など、農産物の価値を高める取り組みも見られます。

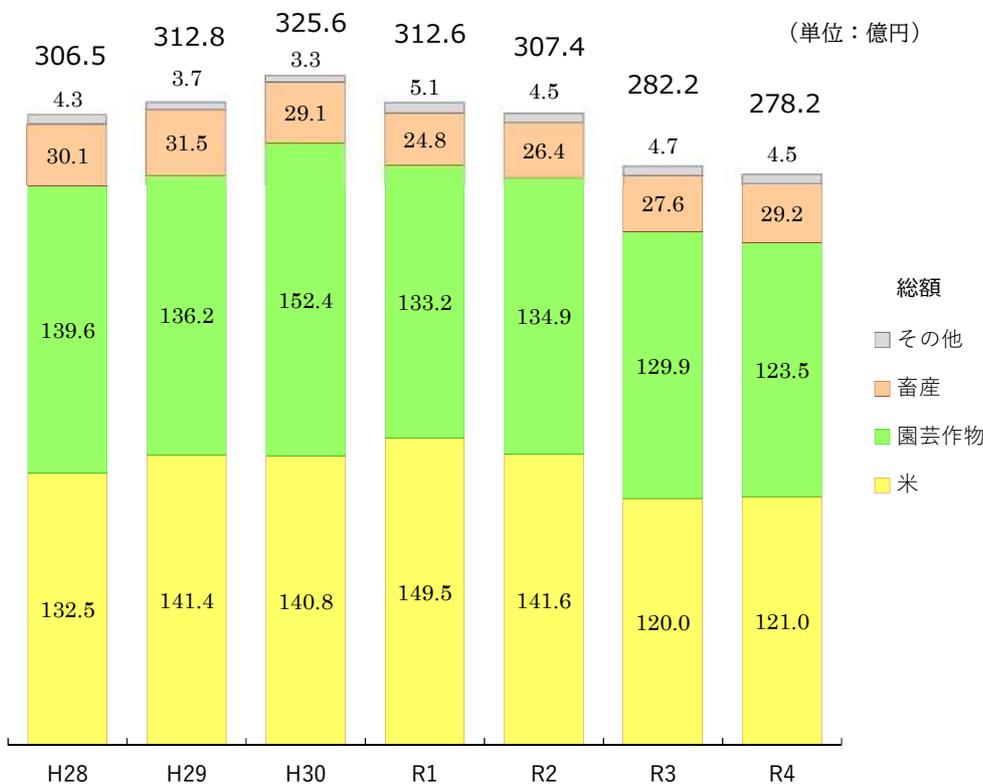
農業産出額については、米価の下落に伴い米の産出額が減少してきた一方、減反政策（平成30年に終了）の推進などにより、園芸作物の産出額が増加しています。令和4年の農業産出額（農林水産省推計）は278.2億円、全国の市町村で33位でした（グラフ「農業産出額」参照）。

大きな課題として挙げられるのが、担い手の減少や高齢化です。本市においては、基幹的農業従事者が年間160人ペースで減少している一方、新規就農者は年間40人ペースに留まっています。こうした現状を踏まえ、平成31年1月に「農業の人材育成・確保に関する協定」を締結し、産学官が連携してそれぞれの知見を出し合いながら、将来の地域農業の担い手の育成・確保に向けたプロジェクトを推進しています。

プロジェクトの中核である市立農業経営者育成学校「SEADS（シーズ）」は、令和6年4月に開校5年目を迎えました。今年度は研修を修了した6名が就農し、2年生7名、1年生8名が座学と実習の研修を行っています。出身や経歴が多彩な研修生が本市農業の活性化に与える影響は非常に大きいものと期待されます。

今後も、地元農業者や新規参入者に対する各種支援を強化しながら、より多くの将来の「地域の担い手」を育成・確保していき、農業を起点とした地方創生が実現できるよう、引き続き市を挙げて取り組んでまいります。

農業産出額の推移



▲ 庄内平野は国内有数の穀倉地帯で、良質な米が生産されている



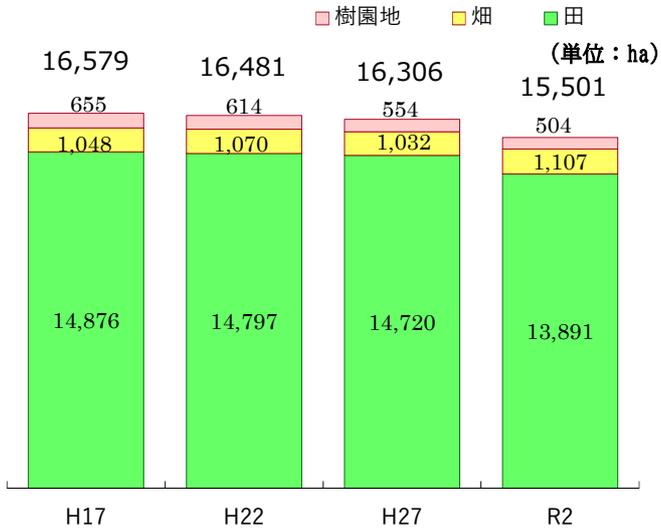
▲ 園芸作物の主力品目の1つであるメロンは、砂丘地の露地やハウスで盛んに栽培されている

出典：農林水産省「市町村別農業産出額（推計）」

農業の動向

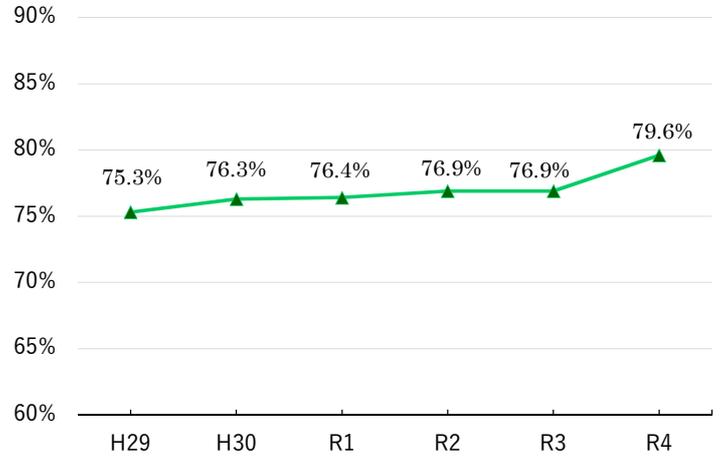
農地

■ 経営耕地面積



出典：農林水産省「農林業センサス」

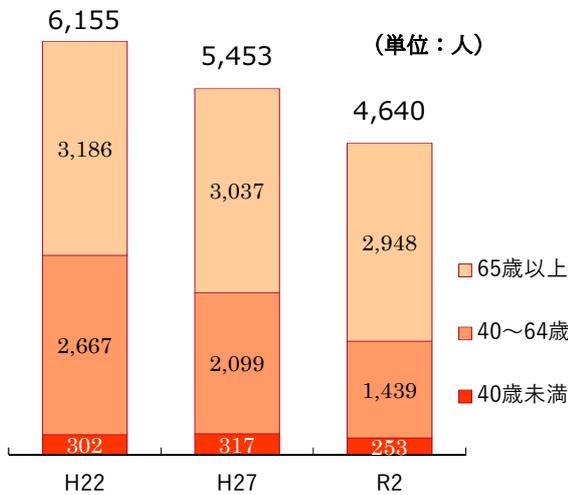
■ 農地集積率



出典：農業委員会調べ

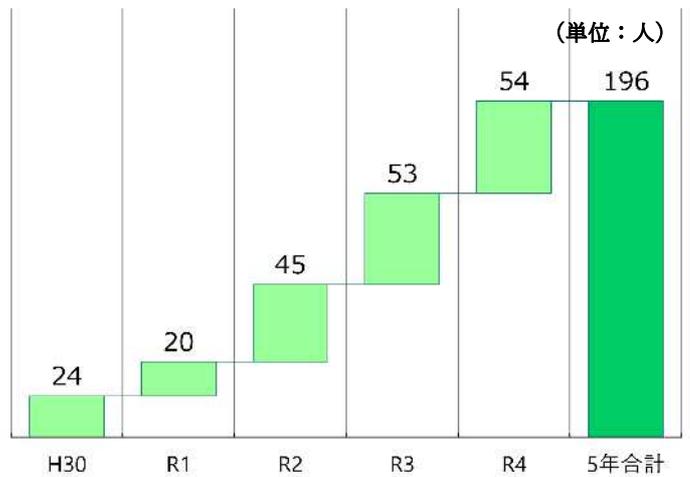
担い手

■ 年齢別基幹的農業従事者数



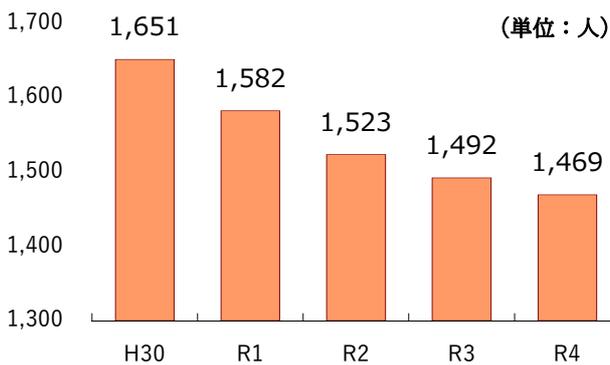
出典：農林水産省「農林業センサス」

■ 新規就農者数



出典：山形県「新規就農者動向調査」

■ 認定農業者数



出典：農業委員会調べ

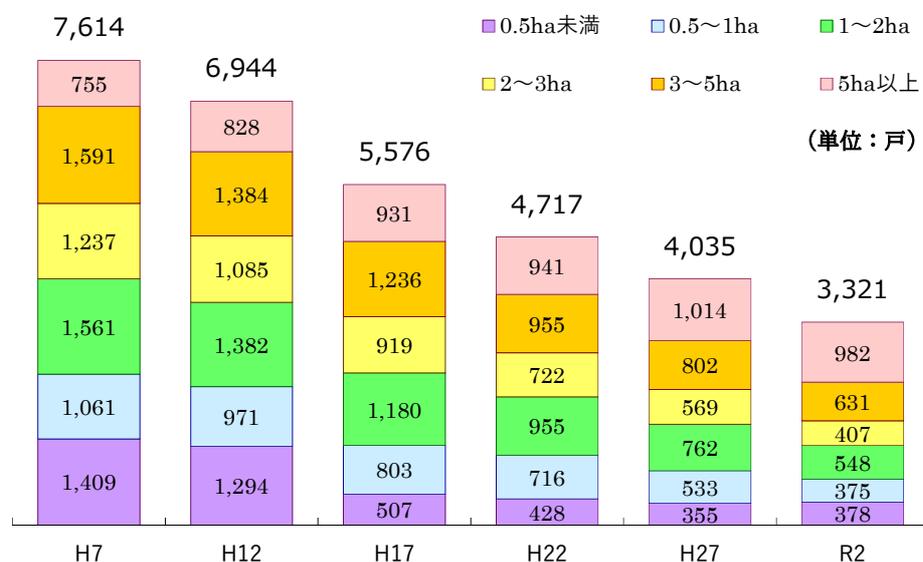
■ 集落営農組織数



出典：農林水産省「集落営農実態調査」

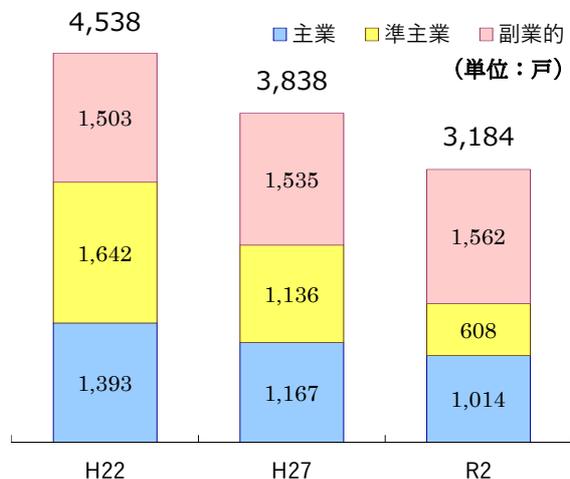
経営

■ 経営耕地面積規模別農家数、経営体数



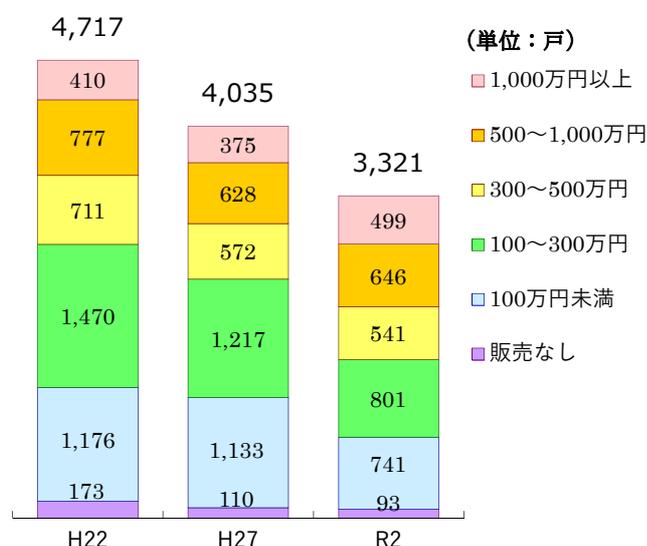
出典：農林水産省「農林業センサス」

■ 主副業別農家数



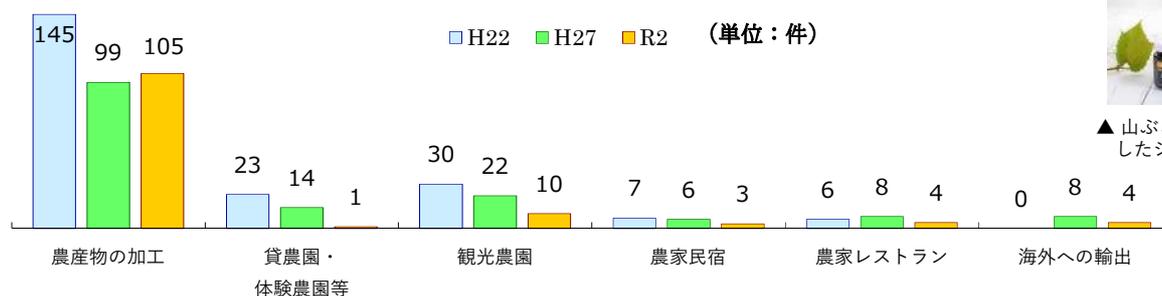
出典：農林水産省「農林業センサス」

■ 農産物販売金額規模別農家数、経営体数



出典：農林水産省「農林業センサス」

■ 6次産業化の取り組み動向



▲ 山ぶどうを加工して製造したジャムとドレッシング

出典：農林水産省「農林業センサス」

農業の動向

■ 鶴岡「旬」カレンダー



出荷最盛期



出荷時期

| 品名 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|--------|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| きゅうり | | | | | | | | | | | | |
| アスパラガス | | | | | | | | | | | | |
| ほうれんそう | | | | | | | | | | | | |
| モロヘイヤ | | | | | | | | | | | | |
| さやえんどう | | | | | | | | | | | | |
| トマト | | | | | | | | | | | | |
| メロン | | | | | | | | | | | | |
| 民田なす | | | | | | | | | | | | |
| さやいんげん | | | | | | | | | | | | |
| 枝豆 | | | | | | | | | | | | |
| ミニトマト | | | | | | | | | | | | |
| みょうが | | | | | | | | | | | | |
| そば | | | | | | | | | | | | |
| さつまいも | | | | | | | | | | | | |
| にんにく | | | | | | | | | | | | |
| にんじん | | | | | | | | | | | | |
| 焼畑赤かぶ | | | | | | | | | | | | |
| さといも | | | | | | | | | | | | |
| キャベツ | | | | | | | | | | | | |
| こまつな | | | | | | | | | | | | |
| 軟白ねぎ | | | | | | | | | | | | |
| いちご | | | | | | | | | | | | |
| あさつき | | | | | | | | | | | | |
| にら | | | | | | | | | | | | |

| 品名 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|--------|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| さくらんぼ | | | | | | | | | | | | |
| ブルーベリー | | | | | | | | | | | | |
| ぶどう | | | | | | | | | | | | |
| 和なし | | | | | | | | | | | | |
| りんご | | | | | | | | | | | | |
| 山ぶどう | | | | | | | | | | | | |
| 庄内柿 | | | | | | | | | | | | |
| ラ・フランス | | | | | | | | | | | | |

| 品名 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|--------|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| もうそう | | | | | | | | | | | | |
| ぜんまい | | | | | | | | | | | | |
| わらび | | | | | | | | | | | | |
| こごみ | | | | | | | | | | | | |
| 行者にんにく | | | | | | | | | | | | |
| たらの芽 | | | | | | | | | | | | |
| うるい | | | | | | | | | | | | |

枝豆



メロン



庄内柿



2 水稲

本市の水稲は、米づくりに適した気候と豊かな土壌に恵まれていること、農業者による優れた栽培技術の継承と新技術の導入が行われてきたこと、そしてそれを支えるきめ細かな営農指導体制が整えられたことなどにより、国内有数の良質米の主産地として発展してきました。

一方、米をめぐる情勢は、米の一人当たりの消費量が昭和37年度をピークに減少し続けています。また、近年は多様な消費者ニーズに応えるように、各産地において、本県における「つや姫」や「雪若丸」のようなブランド米のデビューが相次いでおり、産地間競争も激しさを増しています。

本市の水稲の産出額は、昭和60年の約325億円をピークに減少傾向に転じ、令和3年は約120億円でした。また、農業産出額全体に占める米の割合は、昭和60年の約70%（※）に対し、令和4年は約43.5%でした（グラフ「農業産出額」（P3）参照）。

品種別では、山形県で生まれた品種の作付けが中心で、「はえぬき」の作付面積が半数以上を占め、「つや姫」の作付面積が徐々に増加しています。また、平成30年にデビューした「雪若丸」は、食味ランキングで連続して「特A」の評価を得ており、「つや姫」と同じく作付面積が増加しています。

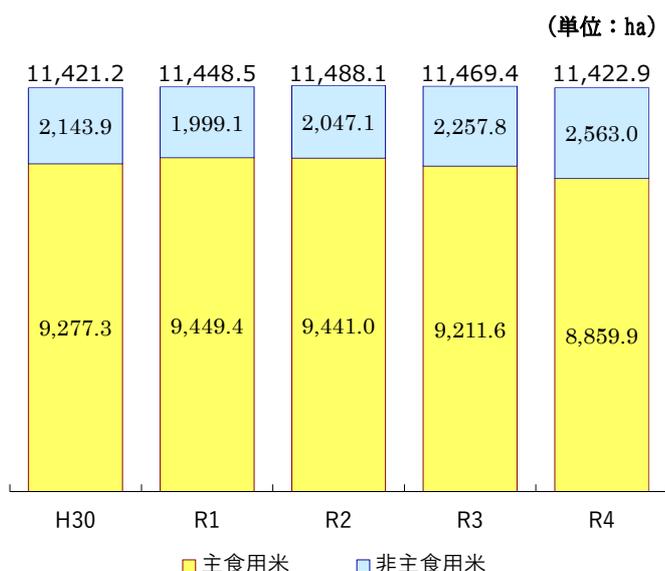
近年は、消費者による食の安全・安心への意識の高まりを受け、有機米や特別栽培米の作付けが拡大しています。令和4年の作付面積は約3,514haで、全体の約40%を占めています。（グラフ「有機特栽培面積割合」（P8）参照）

稲作の規模が拡大する中で、乾燥調製作業を効率よく行うため、カントリーエレベーターやライスセンターなどの共同乾燥調製施設が整備・利用されてきました。しかしながら、施設の老朽化や米の作付面積の減少、稲作農家の減少により、現状のまま施設を維持していくことは困難であり、今後は施設の再編も含めた検討が必要です。

離農者の増加により、農業者1人あたりの稲作経営面積が増加しています。将来にわたって持続できる稲作経営を行うためには、情報通信技術を利用するスマート農業など、新たな技術の導入により省力化・効率化を進めていくことも求められています。

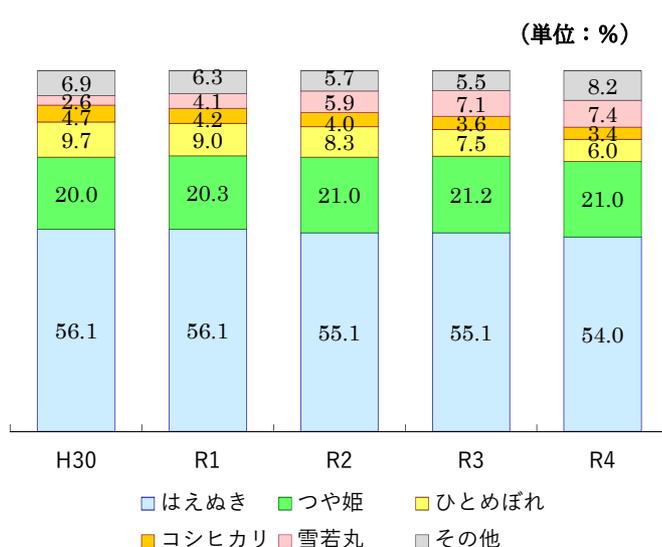
※ 昭和60年の農業産出額は約457億円
（「市町村別生産農業所得統計」より、旧市町村の合計値）

■ 水稲作付面積



出典：鶴岡市調べ

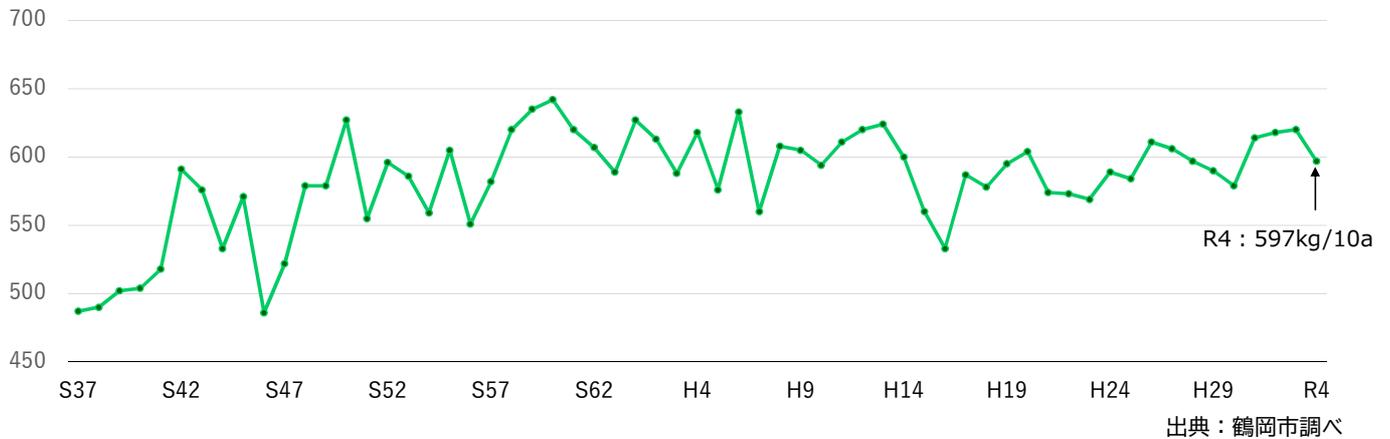
■ 水稲品種別の作付割合



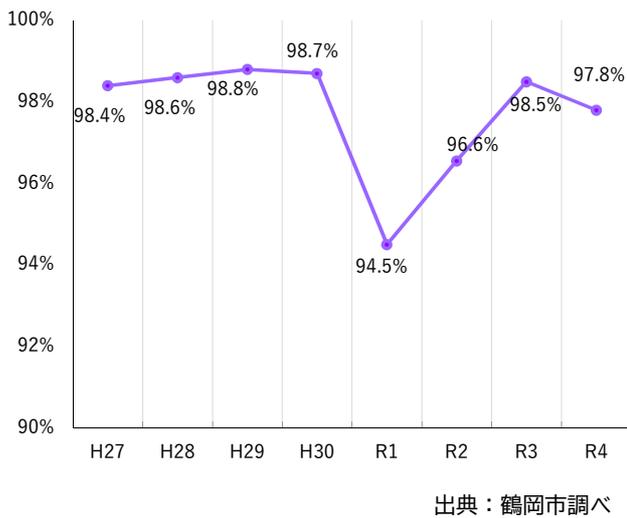
出典：鶴岡市調べ

水稻

■ 水稻平均単収 (単位: kg/10a)



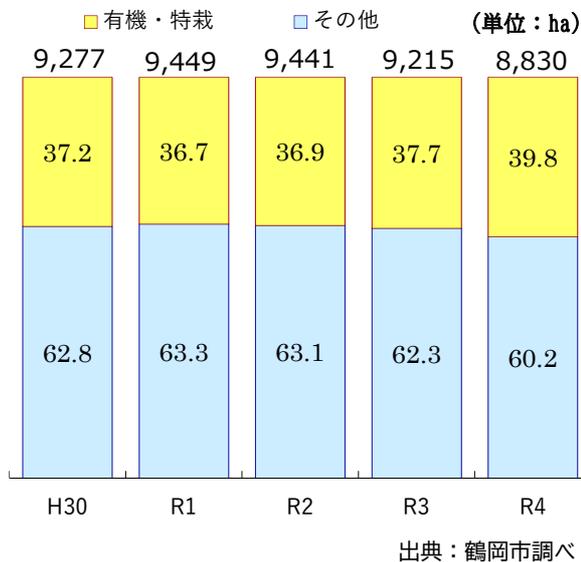
■ 一等米比率



■ 共同乾燥調製施設

| 地域 | 名称 | 設置年度 | 乾燥方式 | 受益面積 (ha) | 処理能力 (t) | |
|----------|---------------------------|------|---------------|-----------|----------|--------|
| 鶴岡 | 大泉カントリーエレベーター | H5 | 混合式 | 670 | 5,025 | |
| 鶴岡 | 西郷カントリーエレベーター | H5 | 混合式 | 350 | 2,756 | |
| 鶴岡 | 黄金カントリーエレベーター | H5 | 混合式 | 380 | 2,850 | |
| 鶴岡 | 京田カントリーエレベーター | H5 | 混合式 | 450 | 3,544 | |
| 鶴岡 | 北部カントリーエレベーター | H4 | 循環型 | 1,100 | 8,662 | |
| 鶴岡 | 大山カントリーエレベーター | H5 | 貯蔵乾燥 ビン方式 | 450 | 3,550 | |
| 鶴岡 | 上郷ライスセンター | S59 | 連続送り (流下)式 | 250 | 1,875 | |
| 鶴岡 | 斎ライスセンター | S61 | 連続送り (流下)式 | 350 | 2,756 | |
| 鶴岡 | 田川北部MRC | H13 | 循環型 | 48 | 333 | |
| 鶴岡 | 田川南部MRC | S61 | 循環型 | 40 | 279 | |
| 鶴岡 | (有)ドリームズファーム ライスセンター | H5 | 混合式 | 40 | 375 | |
| 鶴岡 | 豊浦ライスセンター | H6 | 循環型 | 50 | 331 | |
| 鶴岡 | (有)馬町さくらファーム ミニライスセンター | H26 | 循環型 | 22 | 250 | |
| 鶴岡 | 産直舞台屋ミニライスセンター | H30 | 循環型 | 15 | 225 | |
| 藤島 | 藤島南部カントリーエレベーター | H12 | 混合式 | 420 | 3,568 | |
| 藤島 | 藤やまとファームMRC | H9 | 循環型 | 30 | 225 | |
| 藤島 | 渡前ミニライスセンター | H13 | 循環型 | 30 | 236 | |
| 藤島 | 農事組合法人みます元氣村 ミニライスセンター | H21 | 循環型 | 30 | 227 | |
| 羽黒 | 手向・泉カントリーエレベーター | H8 | 循環型 | 450 | 3,460 | |
| 羽黒 | 広瀬カントリーエレベーター | H12 | 連続送り (流下)式 | 300 | 2,250 | |
| 榎引 | 榎引カントリーエレベーター | H7 | 循環型 | 450 | 3,375 | |
| 榎引 | 榎引町ライスセンター | S61 | 循環型 | 300 | 2,249 | |
| 榎引 | 米工房月山ミニライスセンター | H7 | 循環型 | 25 | 170 | |
| 榎引 | 夢創米館ライスフィールド ライスセンター | H20 | 循環型 | 56 | 325 | |
| 朝日 | 東岩本ライスセンター | S52 | 連続送り (流下)式 | 130 | 720 | |
| 朝日 | 本郷ライスセンター | S53 | 循環型 | 9 | 49 | |
| 朝日 | 朝日中部ライスセンター | H8 | 貯蔵乾燥 ビン方式 | 340 | 2,493 | |
| 温海 | 山五十川ライスセンター | S53 | 循環型 | 53.5 | 240 | |
| 温海 | 小国ライスセンター | S54 | 循環型 | 16 | 238 | |
| 温海 | 小名部ライスセンター | H20 | 循環型 | 30 | 235 | |
| 温海 | 木野俣ライスセンター | H21 | 循環型 | 18 | 140 | |
| 温海 | A・Fファーム乾燥調製施設 | H21 | 循環型 | 10 | 80 | |
| (計) 32施設 | | | | 合計 | 6,913 | 53,091 |

■ 有機・特裁面積割合



3 主要園芸作物

野菜・果樹・花きなどの園芸作物の産出額は、水稻とは対照的に増加傾向にあります。令和4年度の産出額は約124億円と水稻を上回っており、本市の農業は「米」から「園芸作物」への生産構造の転換が進んでいるといえます。(グラフ「農業産出額」(P3)参照)。

本市の園芸作物には、水はけのよい砂丘畑で栽培する「庄内砂丘メロン」、種がなく平らな角形が特徴の「庄内柿」、全国的に知名度の高い「だだちゃ豆」などがあります。

本市では、こうした主力園芸品目に次ぐ有望品目として、地域の特性に合った品目を選定し、全国有数の園芸産地の形成を目指しています。その中で、「ミニトマト」、「きゅうり」の2品目では、生産者の初期投資を軽減するため、国、県補助事業にJAと協調して補助率を嵩上げするとともに、JAリース方式を採用した園芸施設の団地化に取り組んでいます。

主力園芸品目以外では、変化に富んだ地形や土壌、地域の特性を生かし、特徴ある在来作物が現在も育てられています。また、さくらんぼ、ラ・フランス、和なし、りんごなどの果実、行者にんにく、わらび、ぜんまい、ごごみなどの山菜の栽培も盛んに行われています。

こうした在来作物や少量多品種の果実や山菜は、直売施設で販売されているほか、生産者自ら販路を開拓しての直接販売も行われています。また、加工による新商品の開発など、6次産業化による所得の向上が期待できる品目でもあり、市としても取り組みを支援しています。



▲ 独特の「甘み」「旨み」「香り」を持つ「だだちゃ豆」の収穫は夜明け前の早朝から行われる



▲ ミニトマト・きゅうりの園芸施設団地には、大型の農業用ハウスが並ぶ



▲ 「雪中軟白ねぎ」は、土を寄せる代わりに遮光フィルムで根本を覆って栽培する

主要園芸作物の作付面積・出荷量

(平成17年 農林水産省 市町村別作況調査(最終年)、平成29年～鶴岡市推計)(大豆は、農林水産省「統計年報」「作物統計」)

■ 枝豆



テレビCMなどにより全国的に知名度を上げ、日本一の枝豆と称される「だだちゃ豆」をはじめとする枝豆は、複合経営の主力品目の一つとして、また生産調整面積の増加に対応する土地利用型作物として生産面積を拡大してきました。

登録制度、圃場審査、優良種子の採種、栽培記録管理、出荷記録管理など徹底した栽培管理のほか、予冷保管設備での鮮度管理など、味と品質にこだわった生産販売を行っています。

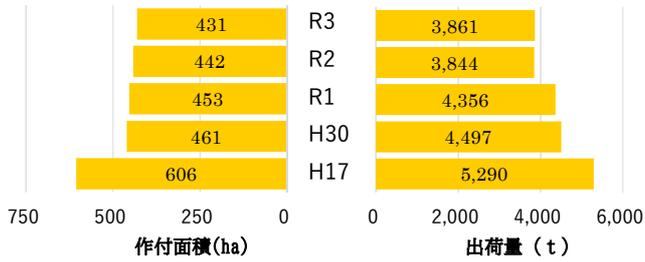
■ メロン



本市海岸部に広がる庄内砂丘は、全国でも有数のメロン産地であり、収穫量は本市の園芸部門でも最大級です。枝豆と同様に登録制度のほか、糖度基準や圃場格付、生産履歴の管理など、栽培管理の徹底により高品質なメロンの安定生産を行っています。主力品種には、従来からの「アンデスメロン」に加え、「鶴姫」、「鶴姫レッド」があります。

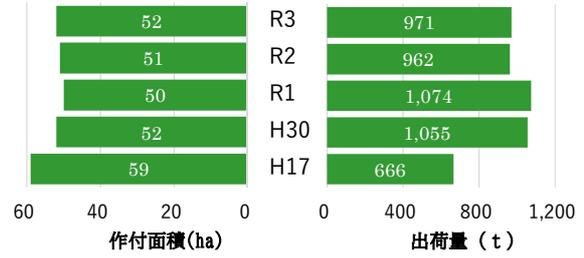
主要園芸作物

■ 庄内柿



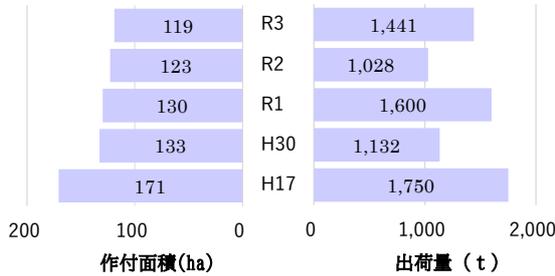
種がなく果汁が多いことから人気を得ていますが、生柿の消費が減少しており、加工品への活用が進められています。収穫最盛期は10月下旬から11月中旬で、アルコールや炭酸ガスでの脱渋作業が必要です。

■ ねぎ



ハウスで遮光資材を使った「雪中軟白ねぎ」は、やわらかい食感と甘みが人気で、首都圏を中心に高い評価を得ています。収穫時期は、雪が降る12月から2月です。

■ かぶ



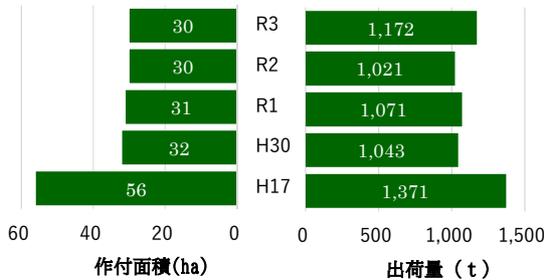
本市の各地で生産されているかぶは、それぞれの土地で昔から生産されている在来作物で、色や形、味などが多種多様です。主な品種に「温海かぶ」、 「田川かぶ」、 「藤沢かぶ」があります。

■ なす



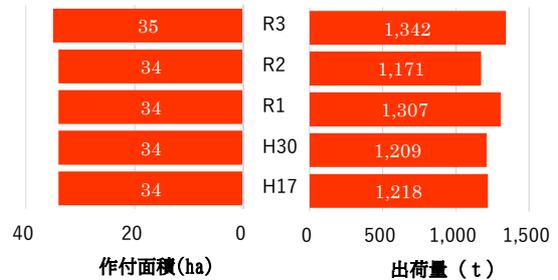
本市では、在来作物である「民田なす」や、薄皮の「沖田なす」をはじめとする一口なすを中心に栽培が行われております。漬物にするなど美味なことから、加工用として生産されるものが多くあります。

■ きゅうり



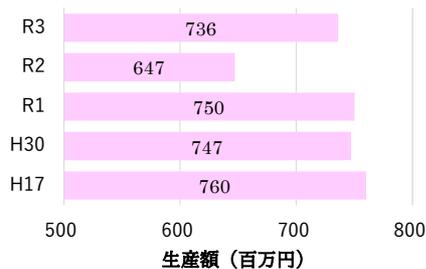
楠引地域では、昭和40年からきゅうりの生産が行われており、現在は庄内唯一の産地です。また、鶴岡地域の外内島集落では、在来作物「外内島きゅうり」が栽培されています。

■ トマト



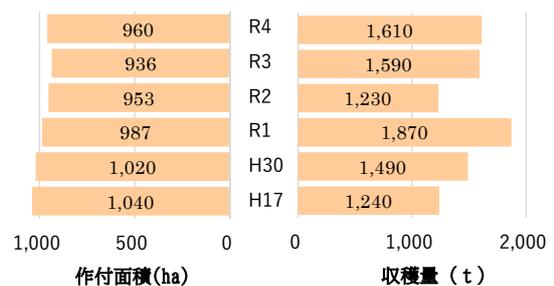
ハウスメロンの後作として栽培されているハウスミニトマトは、8月下旬から11月まで収穫することができます。品質の安定・向上に力を入れており、生産拡大が進んでいます。

■ 花き



鶴岡産の花きは、首都圏や全国各地に出荷されており、高品質な花の産地としての地位を確立しています。主力品種に「トルコギキョウ」、 「ストック」、 「アルストロメリア」、 「スプレー菊」があります。

■ 大豆



生産調整を受けての転作作物として位置づけられてきた大豆ですが、近年は食料自給率の向上を担う作物としても注目されています。本市でも団地化を推進するとともに、収量・品質の向上にも取り組んでいます。

4 畜産業

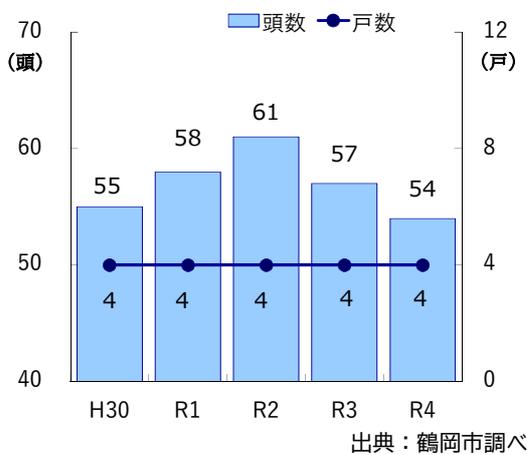
市町村別農業産出額において、本市の畜産業は水稻、野菜に次ぐ規模があります。養鶏業では1戸当たりの飼養頭数が増加傾向にあり、経営の大規模化が進んでいます。

しかしながら、畜産農家の高齢化や担い手不足、また長期的な飼料価格の高騰や周辺環境対策への負担などから、小規模農家を中心に家畜飼養戸数、飼養頭羽数ともに減少傾向にあります。

そのため、担い手の育成・確保、規模拡大や生産性向上のための施設・機械の整備により、生産基盤の拡大と経営体質の強化を進めていく必要があります。

具体的な方向性としては、循環型農業を支える良質堆肥の安定供給の実現に向けて、飼養頭羽数の維持・増頭を目指します。また、家畜の導入支援や適切な家畜ふん尿処理まで生産性向上につながる取り組みを実施し、畜産農家の経営基盤強化を図ります。さらには、畜産農家の生産コスト低減及び労務負担の軽減を図るため、庄内広域育成牧場による放牧事業を推進します。

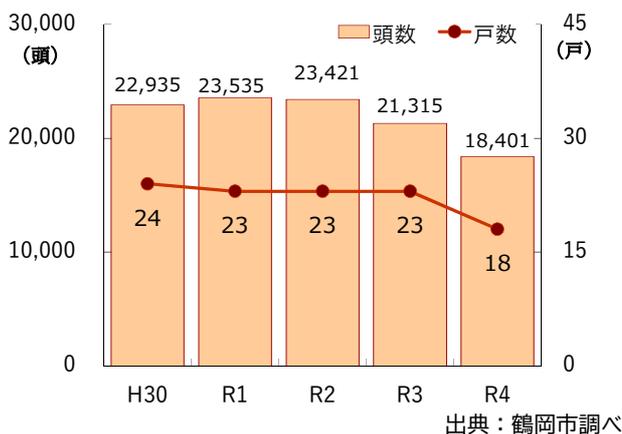
■ 乳用牛の飼養戸数、頭数



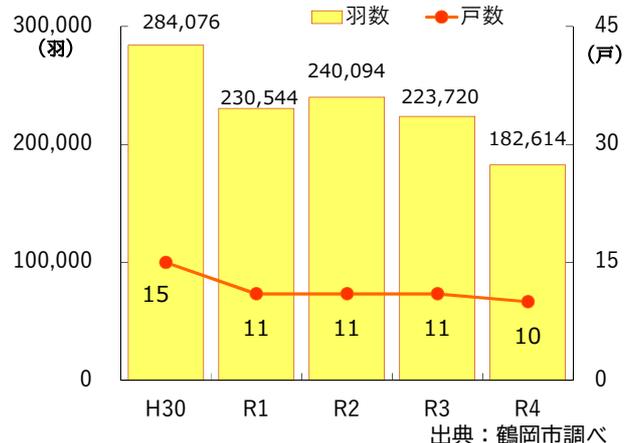
■ 肉用牛の飼養戸数、頭数



■ 豚の飼養戸数、頭数



■ 鶏の飼養戸数、羽数



▲ 月山高原牧場への放牧により、畜産農家の作業負担を軽減し、ストレスのない健康な牛を育てることができる



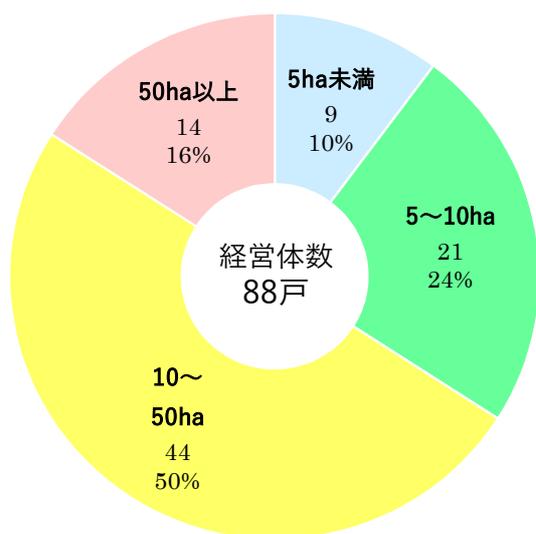
▲ ゆとりある環境で豚を飼育し、高品質な豚肉を生産している

5 林業

本市の林野面積は、合計で約9万6千haに及び、その内訳は約5割が国有林、4割が私有林、1割が公有林などです。私有林の経営規模は小規模分散的で、10ha未満の経営体が34%を占めています。形態については、スギを主体とした人工林面積が20,613haで、木材の蓄積は8,292千m³に達しています。

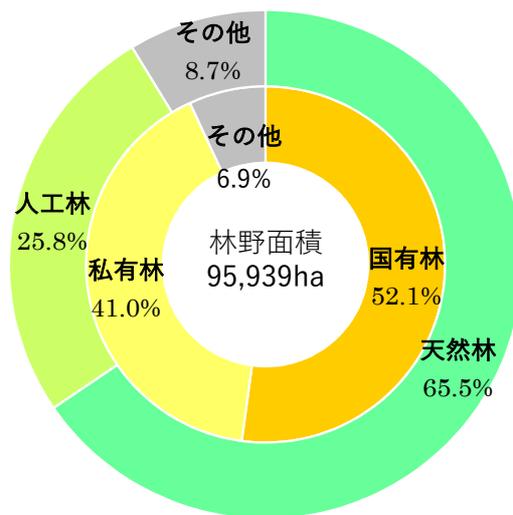
近年は、木材価格の長期低迷や林家の高齢化などにより、森林の管理が行き届かず、森林の荒廃が目立っています。そのため、令和元年度より始まった森林経営管理制度に基づき、管理が適切に行われていない森林は市が委託を受けた後、経営に適した森林は林業事業体に再委託し、経営に適さない森林は市が直接管理することで、林業の成長産業化と森林資源の適切な管理に取り組んでいます。

■ 保有山林面積規模別経営体



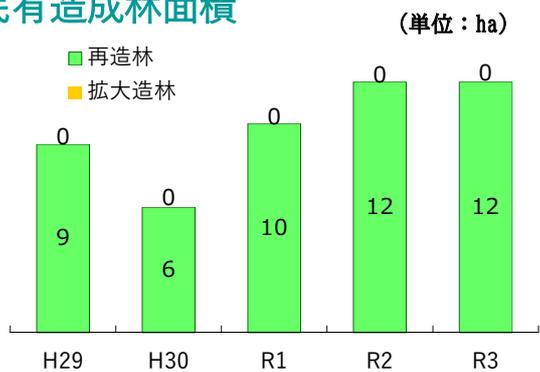
出典：農林水産省「2020年農林業センサス」

■ 保有山林別林野面積



出典：令和3年度山形県林業統計

■ 民有造成林面積



※ 拡大造林：天然林を伐採した跡地に造成したものを指す
 ※ 再造林：スギなどの人工林伐採後に再び造林したものを指す

出典：令和3年度山形県林業統計



▲ 高性能林業機械による伐採作業

■ 林道の整備状況

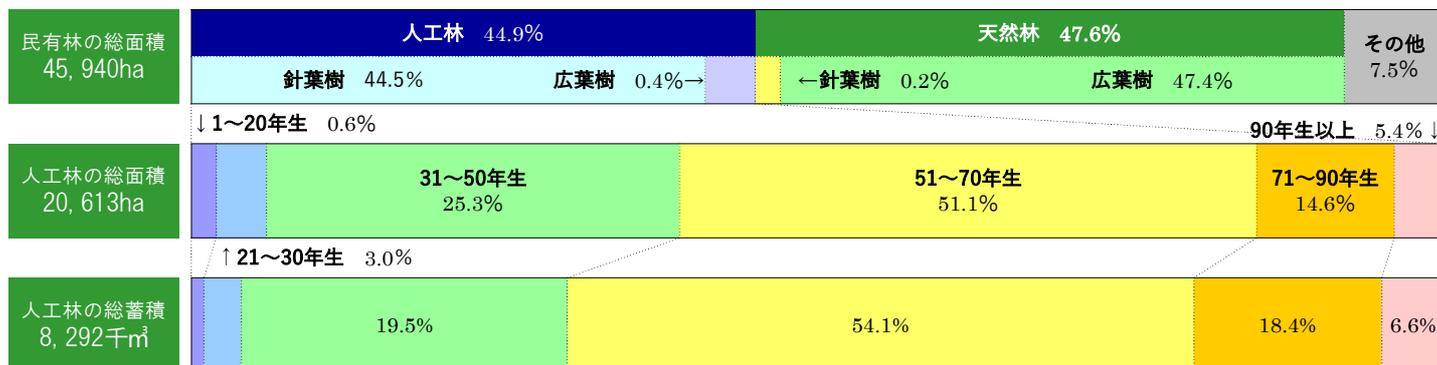
令和4年度

| 路線数 | 延長 (m) | | | | 林道密度 林道延長/私有林面積 (45,940ha) |
|-----|----------|------------|--------|---------|-------------------------------|
| | 幅員3.0m未満 | 3.0~4.0m未満 | 4.0m以上 | 計 | |
| 177 | 107,178 | 179,789 | 36,294 | 323,261 | 7.04m/ha |

※ 林道密度が高ければ高いほど、作業効率が高いとされている (県平均は6.20m/ha)

出典：令和4年度鶴岡市林道台帳 私有林面積は令和3年度山形県林業統計

■ 民有林の面積・林齢・蓄積



※ 四捨五入により合計が合わない場合あり 出典：令和3年度山形県林業統計（一部県による推計）

■ 保安林の指定状況

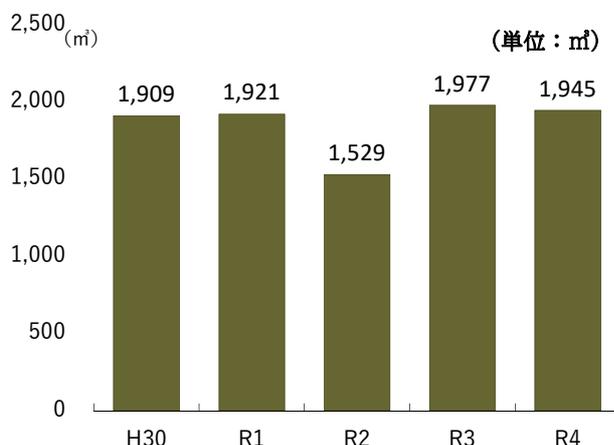
令和3年度

| 保安林の種類 | 面積 (ha) | 保安林の種類 | 面積 (ha) |
|--------|---------------|--------|----------------|
| 水源涵養 | 1,640(47,409) | なだれ防止 | 71(5) |
| 土砂流出防備 | 7,594(1,226) | 落石防止 | 20(1) |
| 土砂崩壊防備 | 45(55) | 魚付 | 53(0) |
| 飛砂防備 | 83(47) | 保健 | 930(109) |
| 干害防備 | 139(447) | 風致 | 22 |
| 合計 | | | 10,597(49,299) |

※ 保安林とは、水源のかん養や災害の防備などの公共目的を達成するために県が指定する森林を指す
 ※ () 内は国有林で、面積は延べ数値で外数

出典：令和3年度山形県林業統計

■ 民有林の松くい虫による被害状況



※ ナラ枯れ病については、H27年（2本）以降、被害なし

出典：令和4年度第2回庄内海岸林松くい虫被害対策強化プロジェクト会議資料

■ 森林組合等

本市には2つの森林組合があります。1つは、平成9年4月に広域合併した「出羽庄内森林組合」で、経営面積は18,107ha（うち、本市16,246ha）、組合員数は5,425名、出資金は1億4,985万円です。

もう1つは「温海町森林組合」で、経営面積は12,141ha、組合員数は1,546名、出資金は9,934万円です。

生産森林組合は18組合（組合員数1,335名、経営森林面積1,936ha）あり、連絡協議会を組織し、研修や情報交換を行っています。（令和3年度山形県森林組合統計）

■ 特用林産物

本市の主な特用林産物は、しいたけ(287t)、なめこ(269t)、やまぶどう(180t)、たけのこ(150t)、ぶなしめじ(161t)、わらび(55t)等があり、農林家の経営の複合化と所得の向上に役立っています。

（令和3年度山形県林業統計）

6 水産業

本市の海岸線の延長は64.7kmで、地方港湾加茂港を境に、北は砂浜地帯、南は岩礁地帯が広がっています。

県管理の漁港4港、市管理の漁港8港、地方港湾2港を基地とする鶴岡市の漁業は、山形県の海面漁業の中では漁獲量は47%、漁獲額は41%(令和2年山形県漁協漁獲年報)を占めています。

鶴岡市における沿岸漁業は、海岸線が単調で冬期間の季節風が強いなど、厳しい自然条件のため、沿岸から沖合にかけての漁船漁業が主体となっています。

そこで、将来にわたり水産資源の安定確保を図るため、イワガキの増殖施設の設置や藻場の保全活動、アワビなどの種苗放流事業を推進しています。

また、県や県漁協、指導的立場にある漁業者と連携した研修制度の充実や、漁船・漁具などの購入経費への補助制度の継続など、就業しやすい環境づくりを進めます。

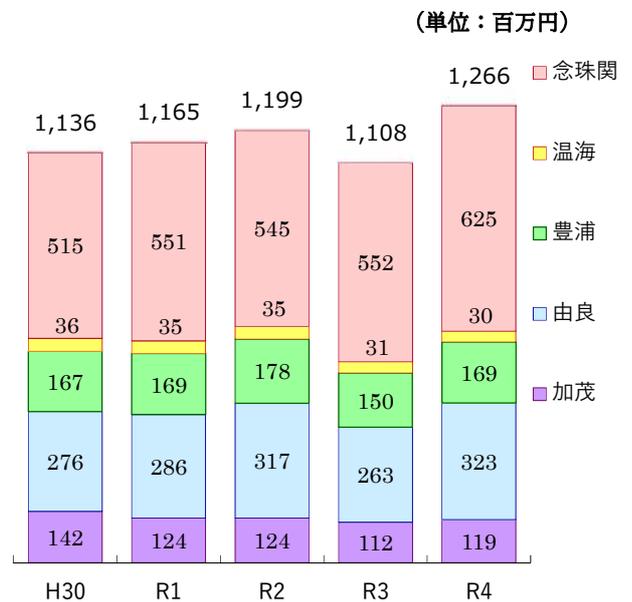
そして、市管理漁港整備計画に基づき市管理漁港の改修を計画的に進めるとともに、港内航行と荷揚げ作業などの安全性の向上を図るため、適正な維持管理を行っています。

■ 漁獲量の動向



出典：山形県漁協統計「漁獲年報」

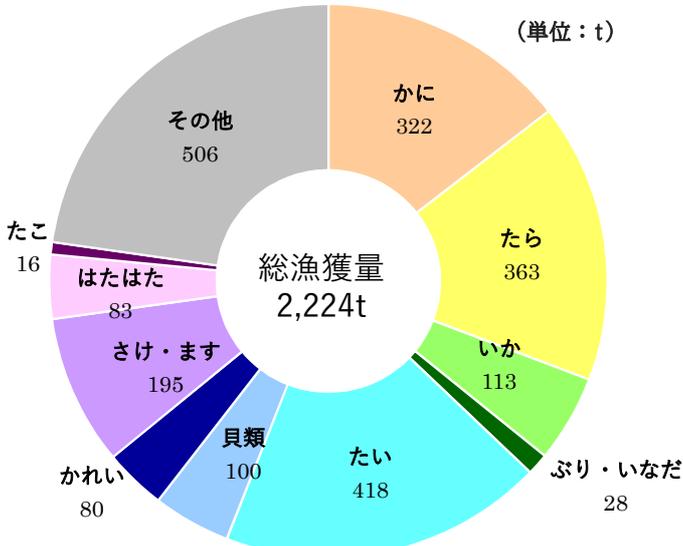
■ 漁獲額の動向



出典：山形県漁協統計「漁獲年報」

■ 魚種別漁獲量

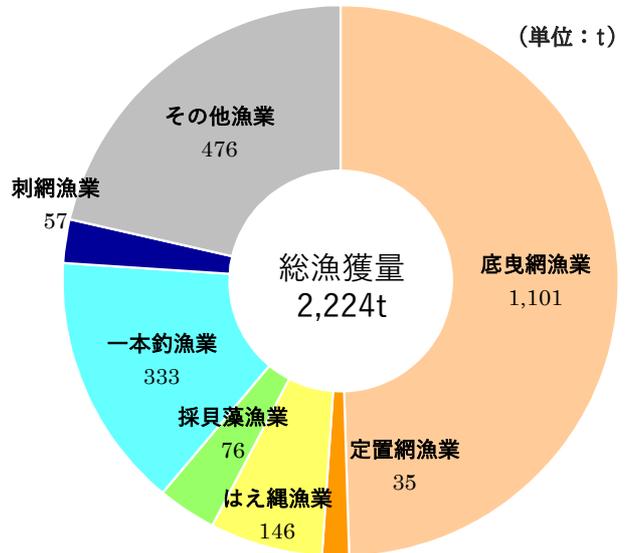
令和4年度



出典：山形県漁協「令和4年度漁獲年報」

■ 漁業種別漁獲量

令和4年度



出典：山形県漁協「令和4年度漁獲年報」

■ 栽培漁業

(1) 海面種苗放流数

| 区 分 | R2 | R3 | R4 |
|------|-----------|-----------|-----------|
| アワビ | 147,500 個 | 147,500 個 | 147,500 個 |
| ヒラメ | 71,250 尾 | 51,000 尾 | 63,800 尾 |
| トラフグ | 13,600 尾 | 13,600 尾 | 7,600 尾 |

出典：鶴岡市調べ

(2) 内水面稚魚放流数

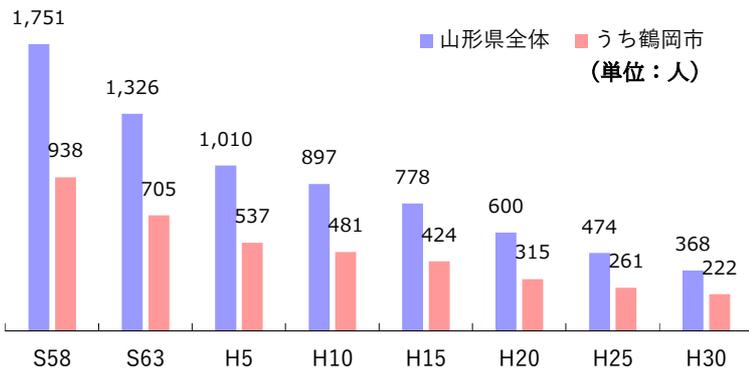
| 区 分 | R2 | R3 | R4 |
|------------|----------|----------|----------|
| サケ | — 千尾 | 882 千尾 | 2,181 千尾 |
| アユ | 620 kg | 770 kg | 1,081 kg |
| ニジマス | 3,000 尾 | 10 尾 | 10 尾 |
| サクラマス(ヤマメ) | 35,000 尾 | 35,200 尾 | 30,200 尾 |
| イワナ | 20,000 尾 | 17,000 尾 | 20,150 尾 |
| フナ | 5 kg | 5 kg | 5 kg |
| モクズガニ | 3,300 尾 | 3,800 尾 | 3,800 尾 |

出典：「山形県の水産」

■ 漁業後継者の育成・確保

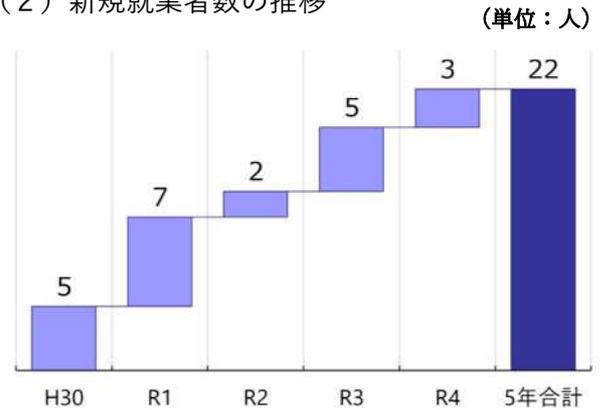
平成30年の漁業センサスの結果では、鶴岡市管内の漁業就業者数は222人でした。5年前のセンサスと比較して約40人減少している一方、新規就業者数は直近5年で約20人とどまっており、今後も減少傾向が予想されます。本市では、「山形県水産業担い手育成プロジェクト会議」と連携して漁業就業者の確保・育成を図るために、具体的な施策の実施を進めています。

(1) 漁業就業者数の推移



出典：農林水産省「漁業センサス」

(2) 新規就業者数の推移



出典：山形県水産振興課調べ

■ 地魚の評価向上と消費拡大

長期に渡るコロナ禍の影響で飲食店・旅館等の利用が低下し地魚消費も低下する中、地元産水産物の消費拡大と地産地消の推進及び市内飲食店・旅館等の利用拡大等を図るため、令和4年10月から12月に漁業者、流通業者、飲食・観光業者と連携した魚のいいまち鶴岡キャンペーン事業を行いました。

キャンペーンには36店舗の仲買人と118店舗の飲食店・旅館等から参加いただき、地魚の消費拡大策として飲食店等への地魚購入費の半額補助を、また、参加店の利用拡大策として積極的な広報活動や抽選プレゼントを実施した結果、高級魚を中心に地魚の需要が高まり、10月と11月の魚価がコロナ前の同月の平均値の150%に向上し、市場が活性化しました。



▲ 地魚が高値で取引され、活気づく鶴岡魚市場

7 農林水産物・直売所マップ

鶴岡市の農林水産物直売所は、平成9年頃から各地に作られ、その数を増やしてきました。大小さまざまな独立店舗型から、スーパーなどのインショップ型、季節限定開設型など、運営形態も多様化しています。

主要施設の売上は、令和4年度で約14.2億円に上っています（鶴岡市調べ）。農産物加工品の取り扱いも多く、6次産業化や地産地消の拠点としても重要な役割を担っています。

